て昔をしのぶ嚴なる神狩の式典を行ふ。當時彼の由布津主命自ら射殺されたる大鹿の角は、現に社寶として保存せり。一日奇鳥の大空を飛翔するあり。その翼金色燦爛として天日爲めに暗く、その鳴聲すさまじく山河を搖したりといふ。由布津主命謂へらくこの靈物たるや天日鷲命なりと。乃ち祖神の稜威を畏れ、山上に命の社を建立せらる。是れ卽ち今の小鷹神社なり。

由布津主命は天富命の御子飯長姫命と鳳齡を契られ、訶多々主命を擧られたり。是れ安房忌部の元祖なり。この神の靈を稚子御前神、飯長孫の靈を姒御神と稱し奉り、その末裔分れて安房忌部の三社となれり。爾來神事を擧行せらるゝ時には、相往來して奉仕を勸むるを例とせり。治承四年九月四日源賴朝社頭に家平大刀を納め、夜をこめて丹誠を盡さる。文安二年里見義實金作りの大刀一口を神前に納め、武運長久を祈らる。本社の年中行事の梗概を起さん。

先づ正月元日には晦日の夜より神官、社人等一同齋場に通夜す。明くれば卯の刻、芋・やうかん・神酒・鏡餅・廻餅・鍬餅等を獻じ、耕田の祝詞を捧げ、天下泰平國土安穩五穀豐饒を祈る。終つて一同禮服を着し、社殿の表向に居並び、氏子參拜者悉く拜賀す。是れ古禮なり。三日又芋羊羹を獻じ、元日供へたる餅二十一、鍬餅廻餅二十一、鍬の柄に擬へ貫き、田耕す三郎禰宜田耕の神事あり。三郎禰宜大柏子太皷を持ち、太田神社にて一同整列す。時に鍬取りて女禰宜の正面に向ひ『氏神様の御田を耕ひ奉る』と唱ひつゝ太皷打ち振りつゝ宮殿の周圍を廻り、大勢にて『ドウダラボ々々』と云ひながら廻り終つて又正面に向ひ、『太田神様の御田を耕ひ申す』と唱へ、又『ドウダラボ々々』と太皷打ちつつ社殿の周圍を廻り終り、又正面に向ひ、氏神様太田様の御田を耕ひ奉り次に『宮方公卿並に御百姓の田耕ひ申す』と唱ふ。前庭にて其の年あきの方に向ひなめ方の牛を呼ぶ。時に牛になる人あきの方より牛と謂つて來る。禰宜は彼の廻餅を取る。次に早乙女を初め參拜の者共各杉葉を稻苗に擬へ、田植の眞似をなす。時に禰宜歌をうたふ。其の歌に曰く、『ニイホンサラリト、ヨフネンナラリト、ホトトギスノコヱモコヱモキウナリ』とかくて唄ひながら田植の眞似をなす。是れ往古よりの神事なり十三日供粥の仕度をなす。卽ち白米を神井の水にて洗ひ清め、社家の二人白茅を刈り取る。焚木は神木を伐り、神主の宅に持參す。これは三郎禰宜の役なり。十四日黎明社家共神主宅に集り、先づ經水廻らざる女子二人をして、洗ひ置ける白米を搗きて粉末となさしめ、白茅にて筒十二本宛二組をつくり、末下刻神主之を淸め、申上刻粥を炊く。『一番炊下の御粥、二番炊上の御粥』と稱す。十五日若年里正並に村民と御粥を開き、五穀豐饒を祈り人事の吉凶を定む。之を筒粥の神事と稱す。三月三日鏡餅を供へ上下の粥を獻し、祈禱を營み神樂を奏す。此の日巳刻祠官社家共體服のまゝ神主宅に於て鼠麹草の餅と桃花とを神前に捧げ、村民一同神主宅にて神酒を拜戴す。之を木綿祭と稱す。俗に和田祭とも云ふ。是れ神主居宅の地名を古來和田と稱すればなり。四月八日早百卯の花を屋上に挿む。又同月中吉日を選び『サウリ』といふ神事あり。蘆を刈取り、之を氏神及諸神に獻す。是亦往古よりの神事なり。六月六日鹽垢離の神事あり。此の日神主始め社人召連れ、布良村より根本村・瀧口村・白濱村・乙濱村・白間津村迄七浦鹽垢離の神事と稱へ、此の浦にて天下泰平海運無難の祈禱を修行す。二十七日『クサタ』の神事あり。神膳・神酒を新萱の箸にて之を神前に捧ぐ。當末社母御前の神事、祭神は飯長姫命玉串を供へ、神主祈禱社人奏樂、右終つて三回禮拜社廻りあり。八月十八月八幡放生神事